

特集『熱性けいれん』

小児科 水上 晋 診療部長

まずは落ち着いて対処することが大切

熱性けいれん



小さな子どもが突然、手足を硬直させ、びくびくとけいれんし始めた！そんな我が子の様子に、落ち着いて対処できるだろうか。こんなとき、日本人の子どもに多いとされるのが熱性けいれんだ。いざというときに、落ち着いて対処するためにも、函館中央病院（函館市）小児科の水上晋診療部長に解説して頂こう。



函館中央病院 水上 晋 小児科診療部長

38℃以上の発熱が 発症の引き金に

「熱性けいれんは昨年、日本小児神経学会でガイドラインが改定されたばかりなのですが、主に生後6〜60か月までの乳幼児期に起こる、38℃以上の発熱に伴う発作性疾患が基本的な定義とされます。この中で、髄膜炎などの中枢神経感染症や代謝異常、その他の明らかな発作の原因となる疾患

や、てんかんの既往のある場合は除外されます」（水上診療部長。熱性けいれんがなぜ起こるのかは、まだよくわかっていないという。しかし、家族内に熱性けいれんの既往のある場合が多い。本格的なデータはないものの、欧米での発症率は3〜4%とされるのに対し、国内は7〜11%と、日本人に多い傾向があることを指摘する報告もある。水上診療部長のもとには、おおむね月10人以上、年間100人以上のお子さんが受

診しているというから、決して珍しい病気ではない。「熱性けいれんが病名とされるように、38℃以上の発熱が発症の引き金となります。インフルエンザやエンテロウイルス感染症のほか、ふつうのかぜが引き金になることもあります。熱の出る流行病のある時期には患者さんが増える傾向にあるので注意が必要です」。

注意すべきは発作時間が長い複雑型熱性けいれん

熱性けいれんは突然現れるので、親が動転してしまうことも少なくない。単純型熱性けいれんと複雑型熱性けいれんに分けられ、比率としては単純型熱性けいれんが多くなっている。単純型熱性けいれんは基本的にけいれんする時間が短いケースをいい、多くは1〜2分程度で、発作の様子は、医学的に「強直間代けいれん」と呼ばれ、強直とは全身に力が入ってかたまる状態、間代とは手足がビクビクと動く状態を指す。

「体をぐつと強張らせた後に、手足をビクビクと動かすけいれんがみられるケースが多いで



かぜがきっかけになることもある。38℃以上の発熱に要注意

す。口をぐつと食いしばることも多く、舌をかみはしないかと心配になって口を無理やり開けようとしたり、口に何かを挟もうとする親御さんもいらつしやいます。これは口の中を傷つけたり、おう吐を誘発したり、窒息する可能性のある危険な行為なのでやめましょう。

意識は低い状態で、問いかげにも応じることはできません。通常、単純型熱性けいれんの場合は白目をむいて、上を見ていることが多い。



単純型熱性けいれんの場合、白目をむいて上を見ているのも特徴

的異常の有無などを調べ、再発予防に向けた治療を行う。予防策として活用されているのが、ジアゼパムという抗けいれん薬。同薬は坐薬で、発熱時に解熱薬と共に使い、熱性けいれんを予防することができるという。

家庭内で発作時に 対処すべきこと

熱性けいれんの多くを占める単純型の場合には大きな心配をする必要はないということだが、例えば食事の最中に突然発作を起こすといったことも起こり得る。今までもなかつた子どもが突然けいれんを始めるのだから、気が動転するのも無理はない。こんなときのためにも、家庭での対処法について聞いておきたい。

「お子さんが突然発作を起こしても、まずは慌てないことが大切です。タンスなどが側にあると上から物が落ちてくることもあるので、安全な場所に移動させましょう。おう吐すると気道に詰まってしまう危険があるので、体は横向きにしてください。けいれんによって体は非常に動いている状態ですが、抱きしめた

いです」。

一方、複雑型熱性けいれんは、けいれんが5分以上続くのが特徴。けいれんの仕方も部分発作と呼ばれ、体の左右片側だけがけいれんしたり、手だけ、あるいは足だけがけいれんすることもある。また、けいれんはみられず、意識が低いままほつとしていたりすることもある。24時間以内に再度発作を起こす可能性があるのも複雑型熱性けいれんの特徴という。

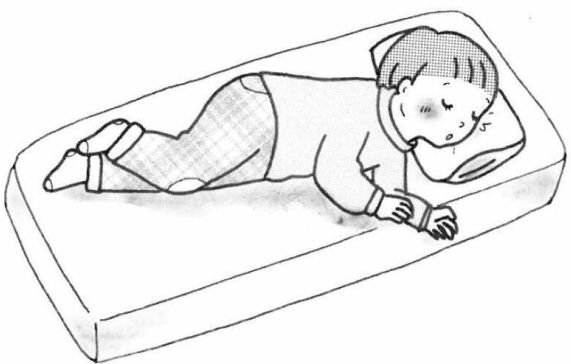
目の状態は単純型熱性けいれん

の場合と異なり、横側を向いたり、左右に動かしていることもある。この特徴は、動転している中では難しいかもしれないが、単純型熱性けいれんと複雑型熱性けいれんを見分ける手がかりにもなるので、確認しておきたい。

単純型熱性けいれんは、けいれんが治まれば、発熱の対処以外に治療の必要はない。救急車で運ばれたケースでも、たいがいは病院到着時に発作は治まった状態で、問題なく帰宅できる。つまり、単純型熱性けいれんのほとんどは大きな心配をする必要はないと考えていい。

「注意が必要なのは、複雑型熱性けいれんです。再発するケースも少なくなく、ご両親に既往歴があると、その可能性は高まります。けいれんを起こす時間が長くなるほど（けいれん重積と呼ばれる）後遺症を残す可能性があり、中には少ないながら将来てんかんに移行するケースもあるので継続的な観察が必要です」。

複雑型熱性けいれんの場合は、救急車で搬送されてもけいれんが続いていることがあるため、そのときにはまずは抗けいれん薬を使って対処する。その後、神経学



おう吐の予防のためにも体は横向きに

り抑えたりするのもよくありません。首周りのきつい洋服を着ているなら、それを緩めることもよいでしょう。前述したように、口を無理に開けようとしたり、物を挟もうとするのも禁物です」。

単純型熱性けいれんの場合は、数分で症状が治まることが多いので、救急車を呼ぶのは5分程度様子を見てからでもよいのではないかといい。けいれんの治まった後に

意識が戻るまでにタイムラグがあり、体の力は完全に抜けた状態になつている。このようなときに体をゆすつたりすると、首などを痛めてしまうこともあるので注意したい。

日常的には、熱が発症の引き金となるため、感染症にかからないよう予防接種を受けることも対策になるだろう。とくに両親に既往歴がある場合は気をつけたい。